

第41回住総研シンポジウム概要(一般公開)

※東日本大震災復興支援事業

テーマ:平成26(2014)年度重点テーマ「作られたものから作るものへ」-主体形成としての住宅連続シンポジウム第3回『場所に生きる-主体性を育む住まいのこれから-』



木下勇氏

平成27(2015)年2月9日(月) 13:30~17:00 建築会館ホール

司会: 木下 勇氏(千葉大学大学院教授)

基調講演: 内山 節氏(立教大学大学院教授/NPO森づくりフォーラム代表理事/哲学者)

パネリスト: 内田 青蔵氏(神奈川大学教授)

松村 秀一氏(東京大学教授)

宮前眞理子氏(NPOコレクティブハウジング社共同代表理事)

村田 真氏((株)日経BP社建設局編集委員)



内山節氏

今年度の重点テーマは、西田幾多郎の言葉「作られたものから作るものへ」を引用し、消費的社会的受動的な存在(作られたもの)としてではなく、暮らしや生活を主体とした住まいを考え、その道筋の見直しを図る(作るもの)として設定された。2月9日に行われた第3回目のシンポジウムでは、哲学者の内山節氏を迎えて本年度のテーマを締めくくる討議が行われた。

第1回目ではユニークな住まいの実践者を迎えて、主体的な住まいのあり方をさまざまな視点から議論。第2回目は、マイホームや持ち家政策など、政策的に誘導された側面を正しく理解し、縮小社会における疑似家族的な居住形態の可能性なども含め、これからの住まいの方向性について議論を進めてきた。そして「場所に生きる」と題した今回は、居住を住まいに限定せず、地域や場所に自分の存在を関係づけることの意味を考えるものとした。また、「そもそも日本に主体性はあるのか?」という、主体性のある住まいづくり実態調査委員会(委員長:木下勇氏)内の議論に端を発して、古来より日本人は住まいや場所とどう関わり合ってきたのか、その根源的な思想に迫る。

冒頭の木下氏による主旨説明では、本テーマの契機ともなった西田幾多郎の言葉「主体と環境とが対立し、主体が環境を、環境が主体を形成していくということは、過去と未来とが現在において対立し、矛盾的自己同一として作られたものから作るものへということである」(西田幾多郎『絶対的矛盾の自己同一』「思想」岩波書店1939年に掲載)に対して、内田節氏の「主

体とは関係の総和である」という考え方を紹介。また、私に意識づけられた第一の事柄は、死者とともに生きる世界として「場所」を浮かび上がらせている内山氏の視点に注目し、場所と主体性の関わりを哲学的な問いかけに答えを求めて、本テーマの総括を試みる旨を述べた。

●基調講演 内山節

「私とは関係の総和である」

内山氏は、はじめに自分の「家」について紹介をした。内山氏の家は、東京都内のマンションと、群馬県の上野村に住まいがある。この二つは同じように言葉は「家」でも、その概念が全く違うと説明した。上野村の家には畑と裏山があって、それ全体が「家」。一方、都内のマンションは、玄関ドアの内側からが「家」。個が自己完結的な生活を営む東京の暮らしとは違い、上野村の場合には、周りの山や畑、近隣など自分の敷地に限定されないさまざまな関係があり、過去と現在の世界とが絶えず関係し合っているような場所であるという。

こうした日本人の生活世界を理解する手がかりとして、日本語の「自然」という言葉が解説された。江戸時代まではこれを「じねん」と読み、この意味は訓読みの「おのずから然り」の通り、自然の成行きを意味したという。一方、明治以降の翻訳言語として使われた「しぜん」は、本来「突然に」というような意味合いをもつ。これに象徴されるように、日本ではすべてのものは何らかの「おのずから」なるものがあると捉えられてきたという。

また、日本に「社会」というシステムが

入ってきたのも明治以降の考え方で、これにいちばん近い言葉は「世間」であった。世間とは、天と地があり、そこに神仏や祖先、死者もいて、自然があって私たちが存在している、そういう世界のなかで日本人は生きてきたと話す。私たちの根源的な思想のなかには、「すべてがつながり合っているけれども捉えられない世界」があって、そのすべてのつながりが「おのずから」出てきている。その「おのずから」を理解すれば、その繋がりの中で私の役割もわかってくる。そして、その役割を果たしていくことが日本における主体性である、と説明した。これが西洋社会の自然との関わりとの大きな違いであり、自分から計画して仕掛けていくようなものが主体性ではない。「おのずから」を見誤って、単純な意味としての「自我」を主張してくると、つまらない生き方になってしまうと指摘した。

つまり、日本思想は実態ではなく関係である。そこに関係が築かれていれば、その先には実体があるという認識、それが「私とは関係の総和である」の考えに辿り着く。内山氏曰く、「私が何者であるか、それを説明するには、どういう関係のなかで生きているのかを説明すれば最もよい。それを聞いている人は、だんだん私が見えて来る。私の実体は私が持っている関係の総和である」として、日本人の根源にある私と場所との関係の認識、そこから日本人における主体性のあり方を解いた。

●ディスカッション

内山氏の話を受けて、4名のパネリストからさまざまな意見が交わされた。その一部を紹介する。内田青蔵氏は、伝統的なものが継承されず失われていく現在の日本の住まいについて、非常に危険な状態であると危惧する。根底に潜む伝統的な関係を見だしながら、新しい住まいや生活文化を構築することが急務であることを述べた。また、関係を継承しない商品住宅が市場に溢れているときに、伝統技能が生き生きとした形では成立し得ないと松村秀一氏は話

す。伝統を現在のものに編集して位置づける設計者の役割、また住宅生産システムのなかで全体に興味をもたずに部分の役割に始終する仕組みを変えていく必要性を問うた。

またコレクティブハウスを運営する宮前眞理子氏は、コレクティブハウスにおける食事の共同化や住まいの自主管理は、農村の共同体を持ち込んでいると説明。都市における関係の創出に可能性を見だし、その関係を専門的につなぐ役割、あるいは住まい手自身が当事者となって関係構築するなど、「おのずから」の発意を広げる要素はたくさんあるはずだと述べた。専門家としてはその関係を支援する空間づくりのあり方を模索するべきだと問題を提起した。村田真氏は、宮前氏の発言に同意しながら、「現在までの都会的な住宅流通のなかでは、その関係のあり方が価値として認められなかったことが問題」と指摘。第2回目に登壇した青木純氏の「青豆ハウス」を事例に、居住者自身が関係性に対して価値を見だししているケースがあることも紹介しながら、これを大きな流れに変えていくためには、関係づくりの部分を貨幣価値にかえていく方法が今後の課題として挙げられた。

関係の再構築や、関係を貨幣価値にかえていく方法の構築は容易ではない。そこで内山氏から、社会が変わっていくときの理由のひとつ「飽きた」という現象があることに注目していると紹介した。理屈や理論ではなく、今までのやり方に飽きたときこそ、変革のエネルギーを放つ。いま、日本はそういう時代がきているのではないかと括った。

※上記シンポジウム内容の詳細は、
平成27(2015)年7月出版予定の
「住総研レポート すまいるん」2015(5号)に
掲載予定。



松村秀一氏



宮前眞理子氏



村田真氏